えない状況ですので、こういうような方向性ということでお話ししておきます。

ということで、こういう我々の細孔というものが、ガスをターゲットにしていますが、当然、環境問題、宇宙や、それからエネルギーの問題、すべてにかかわってくる。そして生命にまでかかわるような、そういうガスを自在にコントロールできる、そういう化学としての多孔性材料、空間というものがあるということを私のメッセージとして、今日はこの話を終えさせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

講演５

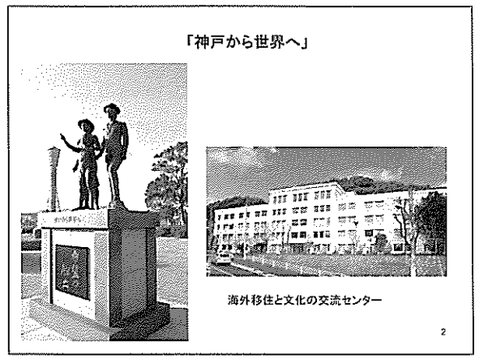
日本人移民の歴史と多文化共生社会の明日

人文科学研究所教授　竹沢　泰子

ただ今ご紹介にあずかりました人文科学研究所の竹沢です。人文科学研究所での私たちの任務は、学際的な共同研究を主宰することです。今日私にお声がかかりましたのは、おそらく私が神戸出身で兵庫県や神戸市と仕事上のおつき合いを続けているからだろうと思います。神戸に調査に入り始めたのは、震災の１年後からです。調査のきっかけは、外国人住民をめぐる自治体と非営利団体の動きを調査する共同研究プロジェクトのなかで神戸を担当したことでした。その後、兵庫県や兵庫県国際交流協会、神戸市などで多文化共生に関する施策を検証したり、あるいは新しい施策を提言したり、外国人共生会議の議長を務めたりするといった仕事でご縁が続いており、多くのことを学ばせて頂いています。今後、人口減少による税収の減少と労働力不足がますます深刻化するなかで、外国人の受け入れは必然的に増えるでしょうし、外国にルーツをもつ人たちと日本人の共生は、日常風景の一部になることでしょう。

普段の研究では、過去と現在の分析を中心としているため、本日のテーマにありますような未来に直接つながるようなお話は、あまり得意ではありません。また研究者として多文化共生を語るのは、それほど簡単ではありません。「お互いの文化や歴史を尊重しましょう」「お互いの人権を認めましょう」といった言葉は、それ自体は長い闘争の歴史から生まれた非常に重い言葉なのですが、それを語るのは、今日の私の役割ではないだろうと思います。むしろ、日本から海外に移住した日本人移民とその二世・三世らの歴史から、間接的に神戸における多文化共生の問題を考えるという設定にさせて頂きたいと思います。

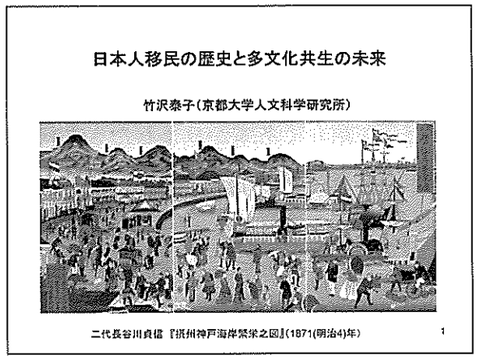
（スライド２）



神戸のメリケン波止場に、神戸港から移民船に乗って海外に移住した人々を記念する「希望の船出」という銅像が建っています（スライド２左）。神戸から、約４０万ともいわれる人たちが海外に移住しましたが、それは日本から出て行った移民全体の約４割を占めています。４０万人のうちの

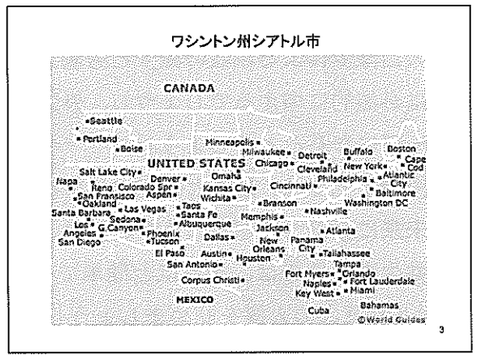
２５万人がブラジルへと渡りましたが、カナダやアメリカといった北米に向かった移住者も数多くいました。トアロードと山本通りが交差する近くに「神戸市立海外移住と文化の交流センター」があります（スライド２右）。かつて移住する人が、身体検査や移住に関する研修を受けたりしながら、日本での最後の日々を過ごしたところです。現在は、ブラジルに移住した人々の歴史と文化について展示されており、その一室に私が監修させて頂いた多文化共生の部屋もあります。これは、明治４年に二代目長谷川定信という画家が描いた作品です（スライド１）。当時はこのように、さまざまな外国人が、今は居留地と言われている場所にいたのでしょう。

（スライド１）



さて本日は、日本人移民のなかでもアメリカ合衆国、それも神戸の姉妹都市であるシアトルの日本人移民を取り上げたいと思います（スライド３）。ご存じのようにシアトルは、１９５７年、日本最初の姉妹都市となりました。ここでシアトルを取り上げるのには、神戸の姉妹都市であるという以外にもわけがあります。シアトルは、これからお話します、日系アメリカ人の戦時中の強制収容に対する補償運動が生まれた地でもあるのです。先ほども述べましたように、本日は日本人移民の歴史を紐解くことによって多文化共生の課題を考えるという設定にしていますので、これからお話することは、日本人移民の歴史ではなく、日本人移民の経験と現在の日本の多文化共生の課題とをつなぐ試みということになります。戦時中アメリカの西海岸に居住していた約１２万人の日本人を祖先とする人々が、砂漠の中の強制収容所に、長い人で３年半にわたって収容されました（年表１）。これについては、後に調査委員会が、人種偏見、戦時中の狂乱、政治指導の過ちという３つが原因であったと指摘しています。

（スライド３）



それでは、人種偏見の背景には何があったのか、少し大きな話から始めたいと思います。１９世紀の半ばにカリフォルニアで金が発見されたことをきっかけに、大量の中国人が西海岸に移住しました。しかし、文化的摩擦、経済的競合、人口の急増が原因で排斥が厳しくなり、中国人排斥法（１８８２年）が成立したため、日本人移民は中国人に代わる労働力として歓迎されました。ところが、日本人が急増し、日本が日清戦争や日露戦争で勝利したことによって排斥運動が高まっていきます。特に日露戦争の後は、白人の国家を、いわゆる有色人種が打ち負かしたということが驚愕をもって受け止められ、「黄禍論（こうかろん・おうかろん）」（Yellow Peril）が、扇動的なメディアによって西海岸を席巻するようになります。その後、日本人を黄色で表象することが増え、第二次世界大戦中には、「黄色いサル」としてメディアなどでは描かれていました。

この黄色という色には、中世ヨーロッパの伝統では臆病、ペテン師、裏切り者といった否定的な意味が含まれていました。この臆病という意味は、黄疸で顔の色が黄色くなることに由来すると言われています。また、伝統的なキリスト教の絵画では、ユダなど裏切り者とされた人が黄色で描かれていました。しかし、白や黒に比べると、黄色についての歴史的文献が少なく、いまだに明らかにされていないことが多いのです。黄色は、当初は金や太陽といった肯定的な意味合いと、病や裏切り者といった否定的な意味合いという両義性を持っていたのですが、徐々に金、ゴールドという色に肯定的意味が付与され、否定的な意味のみが黄色に残されるようになりました。

日本人はそのような背景を知らずに、自分たちはモンゴロイド人種であるとか、黄色人種であると信じている人が多く、場合によっては教科書にも誤った記述がされています。科学的人種論の原点を、１８世紀末ぐらいから紐解いてみると、近代科学の祖と言われたリンネやビュフォンでさえも、ユダヤ・キリスト教的な世界観から自由ではなかったことがよくわかります。

人種概念は歴史の中で社会的につくり上げられ、そして時代によって変わってきました。モンゴロイド人種は必ずしも最初から中国人や日本人を指していたわけではなく、西アジアや中央アジアの人々を指していました。

アメリカにおいて、当初から日本人が黄色だと認識されていたわけでもありません。アメリカの２０世紀転換期ごろの新聞、例えば、サンフランシスコやロサンゼルスの地方紙を見ると、日本人移民を指して、「リトルブラウン」、茶色の人たちという表現が多く見られます。リトルサンボは「ちびくろサンボ」と訳されていますが、リトル、小さいという意味には、差別的な意味合いが含まれています。恐らくブラウンというのは、農業・炭坑など野外で作業をして日焼けをしたという状況があったかと思いますが、日本人は茶色の人としても認識されていました。

アメリカでは１７９０年に帰化法が制定され、そこでは帰化する権利のある人は、「自由な白い人（free white person）」と、「白」で定義されています。その当時、日本人がこの“free white person”に該当したのでしょうか。１９１０年のアメリカの国勢調査を見てみると、日本人でも４３０人、中国人でも１４００人近い人が、「白い人」という条件をクリアして帰化権を得ていました。

つまり、日露戦争で黄禍論が扇動的に唱えられるまでは、それぞれのコンテクストで日本人は茶色、白、黄色と認識されており、「科学」とされた人種学の文献を紐解いて

も、日本人や中国人の分類に関しては諸説入り乱れていました。しかし日露戦争後から１９２０年代初頭にかけて、日本人＝黄色という説が次第に定着したと考えられます。

ここで、お手元の資料に移りたいと思います。これは昔、英語でインタビューをしたものです。インタビュー対象者の名前は一部本名ですが、大体は仮名です。二世の方々も、戦争のときに１９歳が平均年齢でしたから、今はもう９０歳前後になられています。生存されている方も限られてきました。

戦前の日本町の様子ですが、お風呂屋・日本語学校・仏教会などさまざまな施設がありました。ダニエル・イノウエ上院議長代行の回想録には、次のように記されています。

> 我々に倫理や日本史を教えていたお坊さんが、毎日毎日せっせと天皇陛下の神権を唱えていた……。厳粛な面持ちで「皆さんは、ほんのちょっとした運命のいたずらで母国を遠く離れたこの地にいるだけだということを忘れてはなりません。皆さんは何の躊躇もなく絶対の忠誠を尽さなくてはいけません。日本から呼び出しがかかれば、みなさんの体を流れているのは日本人の血であることを思い出しなさい」と教えられたものである。(Inouye １９６７：３６－７)

母語は多文化共生のなかでも大きな課題の一つですが、日系アメリカ人の場合、二世の日本語能力が限られていたので、親子の間でも親が一体どこから、どのような背景で移住したのか、ほとんど複雑な会話ができなかったということです。ここも少し読ませていただきます。

> あれは小学校一年のときだった。一般参観の日に、母と一緒に登校して通訳してあげてたら、先生にいきなり、「お母さんが中国語しか話せないなんて、恥を知りなさい！」と言われてね。あんまり驚いて屈辱を味わって、中国語ではなくて日本語だと正すことさえできなかった。その後、長い長い間、二度と母を参観に誘わなかったの。(バーバラ・ヤマグチ（仮名）竹沢　１９９５：８０)

このように、英語以外の言葉を話すことに関して、教師から非常に屈辱的な言葉を浴びせられるというのは、多くの方々が体験してきたことでした。それもあって、二世は日本語を学ばなかったのだと彼女は言っています。

次にご紹介するのは、身近な人にロールモデル、お手本になるような人がいなかったことと、民族的な劣等意識が結びついているという指摘です。

> 役人は、みんな白人でしょう。そこからしてあの人達の方が偉い、あの人たちの世界のほうがこっちの世界よりも少し優れているという態度を持つようになるわけ。そんなことは誰から教わるわけでもないけど、こっちは自然に二級市民みたいに思ってしまうの。親がいい職業についているわけではないからみんな貧乏でしょう……。それ〔劣等感〕があったから、私たちはコミュニティにしがみついてたのよ。そのほうが居心地はいいんですもの。(ミキ・ハヤシ（仮名）竹沢　１９９４：８５)

このように、教師や役人など、ある程度の経済力や社会的な力がある人々がいわゆる白人、ヨーロッパ系であったということが、彼らに二級市民としての意識を内在化させたと言っています。

さて、一世は土地を持つことが許されない、帰化が禁じられるなど、様々な排斥に遭遇したのですが、それでも生活は徐々に落ちつきつつありました。１９４１年１２月８日(現地時間１２月７日）に真珠湾攻撃の報道が伝えられるや否や、わずか数時間以内に、日本語学校の教師、仏教会の開教師、日本語新聞の編集長、剣道や柔道の師範といった人々が一斉にＦＢＩに検挙され、強制収容所とは異なる戦時抑留所に収容されたのです。

その後、１９４２年の２月に、大統領行政命令９０６６号が発令され、西海岸の指定地域から日本人を祖先とする者、約１２万人が強制的な立ち退きと収容に直面しました。そのときには手荷物１個しか持つことを許されませんでした。つまり、トランク１つしか許されなかったのです。小さな赤ん坊を抱えていたら、その着替えやおむつを入れるだけでいっぱいになります。これはその移動するときの様子です。(スライド４)

(スライド４)

これによる当時の経済的損失は、１９８３年の公聴会による調査委員会が発表した時点では約１５億ドルと推定されています。仮に１ドル１００円とすると、１５００億円相当の経済的損失を被ったのです。大農場をはじめ一世が長年蓄積した富が一瞬にして失われました。

ベインブリッジ・アイランド（Bainbridge Island）というシアトルの郊外地域では、３日後に立ち退きの通告が出たので、二束三文のような値で買いたたかれ、全部処分しなければなりませんでした。平均年齢が１９歳でしたから、大学に行きかけていた、あるいは行こうと思っていた人は教育を中断されるわけです。もしあのまま大学に行っていたら、もしそのままビジネスを続けられていたらと考えると、その後の経済的な損失は計り知れません。

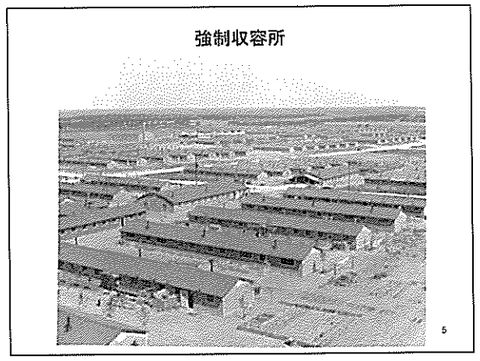
強制収容所はこのように、鉄条網で囲まれ、そして監視塔では銃を持った兵士が銃を内側に向けて、２４時間監視していました。夜トイレに行こうものなら、サーチライトにトイレに行くまでを追われるという生活でした。（スライド５、７）

収容所の中では写真撮影が禁じられていたため、軍が撮影した写真ぐらいしか残っていません。それらの写真を見ると、笑顔の日系人の写真しか見つからないのですが、幸いミネ・オオクボという芸術家が数多くのスケッチを残していました。スライド６は、人々が静まり返って、バスに乗って連れて行かれる様子ですが、このような監視下の中で３年半過ごしたのです。彼らはもう既にナチスによるユダヤ人の扱いについて知っていたので、自分たちもいつ同じように、ＦＢＩによって命の危険にさらされるかわからないという恐怖感に苛まれながら暮らしていました。

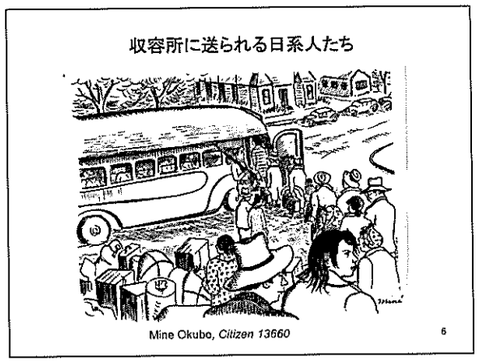
スライド８は収容所内の食堂の様子を描いたオオクボの絵です。鐘が鳴ると食堂に行くのですが、それまで一家を養い、小遣いを与えていた父親の権威がことごとく失われました。また、子どもたちは子ども同士、男性は男性同士、女性は女性同士で食事をするので、収容所において家族が永久に崩壊したと語る人もいます。

トイレにはドアがついておらず、プライバシーが全くありませんでした（スライド９）。

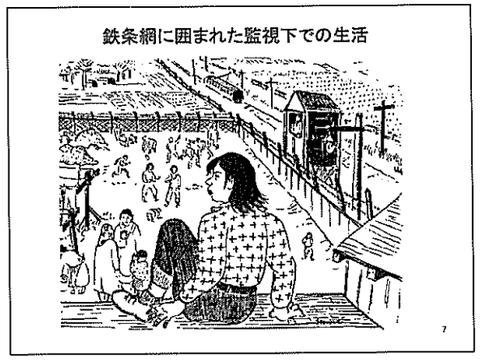
（スライド５）



（スライド６）



（スライド７）



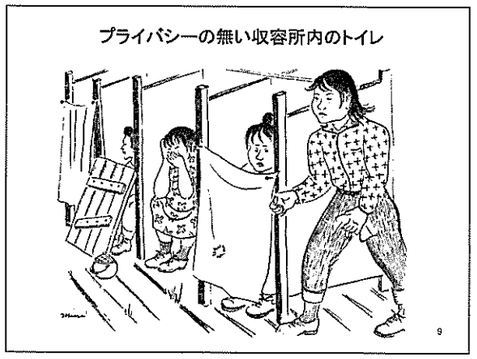
（スライド８）

男性のトイレはこの衝立てさえもなかったのです。適齢期を迎えた子どもをもつ家族も多くありましたが、狭い部屋を毛布で仕切って生活していました。

統計は残っていませんが、多くの方が、数多くの一世が自死をとげたと証言しています。大半の一世はすでに５０代に達していましたので、ビジネスを再建する力がなく、絶望して多くの人が自死を選んだと聞いています。（スライド１０）

次は「罰せられた日本との繋がりとその心理的影響」です。いわゆる「ノー・ノー・ボーイ」について聞かれたことがあるかもしれませんが、それは以下の質問の第２７問、第２８問に関わるものです。

（スライド９）



（スライド１０）

第２７問

あなたは合衆国軍隊に入隊し、命ぜられたいかなる戦闘地にも赴き任務を遂行する意志がありますか。

第２８問

あなたはアメリカ合衆国に対し無条件の忠誠を誓い、内外のいかなる武力による攻撃からも合衆国を忠実に守り、日本国天皇あるいは他の国の政府や権力組織に対し、あらゆる形の忠誠や服従を拒否しますか。

これらの質問は、一世の人にとって非常に残酷な質問でしたし、一つの家族がイエスとノーに分断されるという悲劇を引き起こしました。

また、政治的な活動をしていなくても、日本と文化的なつながり、人との絆があるだけで処罰されたということが、次のワシントンＤＣの国立公文書館から出てきた資料で明らかになっています。例えば、日本に三度以上旅行したことがある、あるいは神道の信者であるというだけで強制収容所から早く出ることは却下されたのです。キリスト教徒であればプラス２点、仏教徒ならマイナス１点、日本語の読み書き、会話能力に優れていればマイナス２点。それから、資料の第２１問と比べていただきたいのですが、犯罪を犯し有罪と宣告されたことがある場合は、マイナス１点だけだったのです。つまり、犯罪者よりも、

日本語の読み書きができる、あるいは会話能力に優れているということのほうが、実際的に収容所を出る際に不利に働いたのです。

これらの合計点が「白」ゾーンなら収容所を出ることができたし、「黒」だったら出ることができず、「茶色」であれば保留でした。

人種差別によってヨーロッパ系の人と同じ部隊に入れなかった日系兵士は、アフリカ系の人々と同様に、日系だけの隔離部隊をつくられることになりました。二世の人々の中には、両親や、兄弟、親戚を鉄条網の中に残しながらも、日系人部隊に志願する人々がいました。多くの人がその矛盾を不条理に思ったわけですが、「アメリカ国籍を持っているとしても、危険分子だ」と忠誠を疑われていたため、アメリカへの忠誠を示す唯一の方法は自分の命をかけることだと思った人たちが、二世部隊に志願したのです。

有名な４４２部隊は、アメリカの歴史において最も活躍した部隊だと言われています（スライド１１）。最も輝かしいとは、最も多くの犠牲者を出したという意味で、２１１名のテキサス部隊のアメリカ兵を救出するために、死傷者の数は８１４名、約４倍に及びました。そのうち死者は１４０名でした。ほとんど自殺行為のようなミッションを与えられたのです。

日系兵士はいろんな地域で活躍し、沖縄戦でも活躍しました（スライド１２）。以下は軍の情報部で活躍した方の証言です。彼はある時、サイパンで洞窟に隠れる日本兵に降伏を説得しました。

（スライド 11）

（スライド 12）

私はヘルメットをとり、自分の日本人である顔を見せました。すると日本の兵士の一人が、「なぜ日本人のあなたが――。なぜあなたがアメリカ軍として戦っているのですか」と尋ねるのです。そこで私は、「日本にこういう格言があるでしょう」と日本語で話し始めました。昔日本に、父親と戦う息子がいて、父親は天皇側に属し、自分の息子にも同じ側について欲しかったのです。そこで私は言いました。『忠ナラント欲スレバ孝ナラズ、孝ナラント欲スレバ忠ナラズ』。私がそう言うと、一同全員立ち上がり、深々と頭を下げるんです。そして隊長が、礼をして言いました。「失礼なことを申し上げて、どうかお許しください」。（ホウイチ・クボ（本名）ドキュメンタリー・フィルム『栄誉の色』）

これは、ドキュメンタリーフィルムの中にあった言葉で、実際の証言です。

１９４５年に西海岸への帰還が許されるのですが、その後、日系兵士の活躍は讃えられ、「あなた方は戦地で戦っただけではなくて人種偏見と戦った」とルーズベルト大統領からも称賛されました。１９６６年には、『ニューヨークタイムズ』紙で、日系人の成功物語という記事が話題を呼びました。このサクセスストーリーというラベルは、今では偏見だと批判されていますが、当時は日系人の成功ということで称賛されました。

１９６９年頃から、マイノリティ運動の余波を受けた一部の日系三世らによって、戦時中の強制収容に対する補償を請求しようという運動が広まります（スライド１４）。この運動は、８０年代に入って本格化していき、１９８１年には、「戦時民間人転住・収容に関する委員会」が設置されて、公聴会が全米各地の日系人人口の多い市で開かれます。シアトルでも開かれました。そこでは、何十年も知っている自分たちの身近な人から、一度も聞いたことがないような話を、三世は初めて聞いて驚いたのです。

（スライド 14）

強制収容へと導いたのは、人種偏見と戦時中の狂乱と、政治指導力の欠如であったと公聴会は結論付け、一人あたり２万ドルの個人補償、正式な謝罪、教育基金の設立を勧告しました。その後、レーガン大統領が１９８８年市民的自由法に署名、９０年にブッシュ大統領が歳出を保証する法案に署名することにより、補償金の支払いがついに１９９０年に始まりました。

この間ですが、ジェニー・ミヤガワ（仮名）は、真珠湾攻撃のあった１２月７日の経験について、次のように語っています。

来る年も来る年も一二月七日になると、学校に行くのが嫌で嫌で。本当にひどかったわ。といっても私たち日系人のほぼみんなが経験して典型的なことだけど。一年中で家から外に出るのにこれほど悪い時って他にはないわ。初めてそういうことに気づいたのはね、ある年小学校に行くのに歩いていると、石を投げられて、「ジャップ！ジャップ！ジャップ！」って追いかけられたことがあって。でもそういうことってよくある話よ……。こんなことは本当に誰にでもよくあることだった。あんまり頻繁に起こるもんだから、考えなかったくらい。（竹沢

１９９４：１５０）

(スライド 13)

私と同じ世代の人たちからも、そのような話をよく聞きます。私がシアトルに住んでいたのは８０年代、ちょうど日米貿易摩擦が悪化した時で、貿易戦争という表現がよく使われていました。実際、真珠湾攻撃の爆弾のイメージがテレビで流れていました（スライド１３）。１２月７日になると学校をよく休んだという友人もいました。また、ヒロシマ、ナガサキの記念日が近づくと、読者欄に、「リメンバー・パールハーバー」（真珠湾攻撃を忘れるな）という投稿があったりするのです。それは貿易摩擦が最も問題化した８０年代の話ですが、日本にいる私たちには直接的な影響が及ばなくても、アメリカに住んでいる日本をルーツとする人たちに、直接降りかかっていたことでした。

英語で補償をリドレス（redress）と言うのですが、この言葉には、過ちを正すという意味があります。補償による過ちの是正、英語で補償運動のことをリドレス・ムーブメント（Redress Movement）と言います。

> 私が思うには、公聴会の時からかしら、大きな問題になったのは。色んな人の証言や、色んな悲しい話を聞いていた時に、「ハクジン」が新聞社に手紙を書いて……。「自業自得」だと書いてるじゃありませんか。読めば読むほど、聞けば聞くほど、ますます腹が立ってきて、それで謝罪だけでは不十分だということがわかったんです……。ああいうことを言うんでは、〔金銭的補償を得ることが〕我々がどんなに苦しんだかを一般の人々に知らしめる唯一の方法だということを認識し始めたんです。お金の額じゃありませんよ。原則の問題です。（スミ・ハシモト、二世（仮名）竹沢 １９９４：１８７）

(スライド 12)

スライド１２は、通訳の日系兵士が投降を呼びかけている様子です。例えば、読谷のシムクガマというところで、約１０００人が洞窟に隠れていたときに、日系兵士が「出たらアメリカ兵に殺されるし、女は強姦されるというふうに聞かされていたけれども、出ても誰も殺しはしないよ、危害は加えないよ」と説得したことで、集団自決が回避されました。ここで活躍したのは、ハワイにいた沖縄出身の移民二世ですが、彼はアメリカと日本のかけ橋となったと言えます。

(スライド 15)

スライド１５は、９・１１の後、アメリカ国籍の有無にかかわらず、ムスリム、アラブ系の人たちを大量に集団規模で拘留するという案が浮上した時、各地で日系アメリカ人たちが、第二次世界大戦中の過ちを二度と繰り返してはいけないと訴えたときの様子です。スライド１６では、私は敵国の者ではありません、と訴えるムスリム達を支援しています。

(スライド 16)

スライド１７～２０は、今冬シアトルに行ったときに、戦前日本語学校として使われていた建物を訪れたときのものです。今は日本文化を伝えるコミュニティセンターになっています。ここで、「会いたい兵庫」という、ワシントン州と姉妹県である兵庫のポスターも見つけました。

人種差別の問題では、アメリカは憲法を神聖化しているため、その憲法を踏みにじる第二次世界大戦中の日系人に対する行為は、国の信条にかかわるということで、当時のアメリカ経済の苦境にもかかわらず、１０数億ドルが歳出されました。

補償に関しては、一般社会はもちろん、日系人のコミュニティの中でも賛否両論がありました。２万ドルという値札をつけることは、２万ドルでアメリカ政府に罪の意識を買わせるようなものであるなど、さまざまな意見がありました。一つ参考になる出来事があります。１９７６年のアメリカ建国２００周年のときに、大統領行政命令９０６６号がまだ有効で、フォード大統領が破棄する署名をしたのですが、それと同時に「アメリカの誓い」という文にも、サインしました。その「アメリカの誓い」の中には、第二次世界大戦中の強制収容は過ちであり、日系アメリカ人は当時も今も忠誠なアメリカ人であると明記されています。

しかし、過ちであったと書いても、「アメリカの誓い」を知る人はほとんどいません。日系人の中にもほとんどいないのです。したがって、やはり額の問題ではなく、金銭的に補償することが一般の人々に広く知らしめる上で重要だったというスミ・ハシモトの見解は、うなずけます。

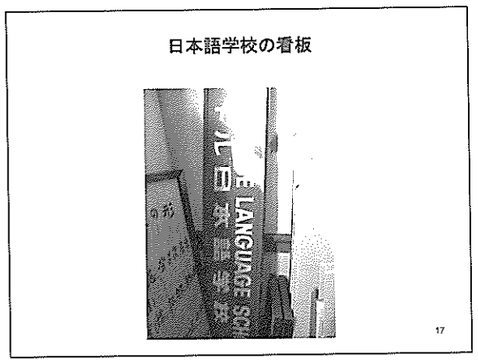
日本は、１９９５年に人種差別撤廃条約を批准しています。通常、この条約を批准した国は批准と同時に人種差別に関する法律をつくるのですが、日本ではそのような法律がいまだに存在しません。政治家や自治体の長が人種差別的な発言をしても、これをコントロールする特化した法律が存在しないというのは大きな問題ではないでしょうか。

最後に、日本についてもう少し話をしますと、多文化共生という言葉は、１９９３年ごろに神奈川県で生まれたと言われています。当初ごく一部の人たちの間だけの言葉であったものが、神戸の震災のときに、一般に広く知られるようになりました。私は、これが一過性のものではないかと思っていたのですが、震災から１７年たった今、そうではなかったことを実感します。新潟県中越地震、海外での地震、今回の東日本大震災の時も、神戸の人たちが築き上げてきたノウハウ、情報、人の絆が生かされているようです。

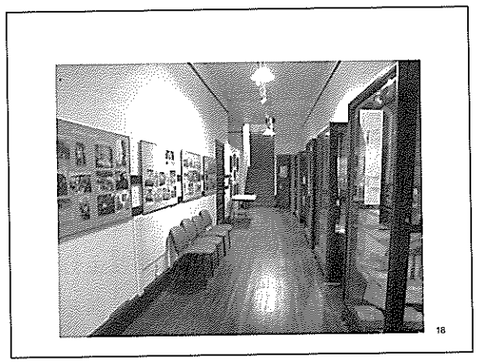
神戸では、外国にルーツをもつ子弟の教育問題に対して、彼らのための奨学金がつくられました。特にベトナム系と南米系では、経済的な理由から公立高校への進学もままならない子どもが半数近くいるという統計が出ています。

スライド２１は、北朝鮮がミサイルを発射した時に、灘駅の南側にある朝鮮学校が赤ペンキで落書きされたり、子どもたちがチマチョゴリを切られたりといった嫌がらせが起こった時の写真です。

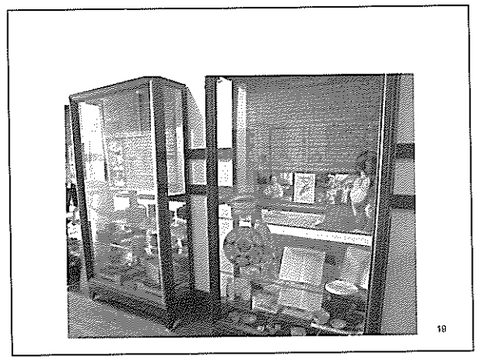
(スライド 17)



(スライド 18)

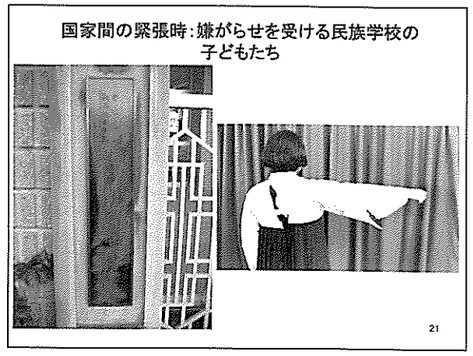


(スライド 19)



(スライド 20)

(スライド 21)



集団間の結婚が増えれば人種差別問題は解決するのではないか、と考える人もいるようですが、これは必ずしも正しくないのではないかと思います。南米では何百年にもわたっていわゆる「混血」が進んできましたが、今日でも皮膚の色によって社会は階層づけられており、人種差別が根強く存在することはよく知られています。

本来は、最後に未来の提言をしなければならないのですが、それはほかの場でさせていただくことにして、お時間のありますときに、海外移住と文化の交流センターに足を運んでいただき、多文化共生の部屋をのぞいていただければありがたく思います。

ご清聴どうもありがとうございました。(拍手)

(年表 1) 日本人移民と二世・三世の経験

重要な歴史的出来事

19世紀末～20世紀初頭	日本から北米への移民ラッシュ
1907 ～ 1908 年	紳士協約
1924 年	1924 年移民法　日本人移民受け入れ　完全停止
1941 年 12 月	真珠湾攻撃／日米開戦　日系リーダーの検挙・拘束
1942 年 2 月	大統領行政命令 9066 号
1942 年 3 月	西海岸の日系人 12 万人　強制立退き強制収容始まる
1945 年	西海岸への帰還許可
	二世兵士　沖縄戦で多くの集団死を回避
1966 年	『ニューヨークタイムズ』　日系人の「成功物語」
1970 年代初頭	補償要求の提唱始まる
1981 年	「戦時民間人転住・収容に関する委員会」公聴会
1983 年	同委員会　2 万ドルの個人補償、正式な謝罪、
	教育基金の設立を連邦議会に勧告
1988 年	補償法案通過　レーガン大統領署名
1990 年	ブッシュ大統領署名　補償金支払い開始
2000 年	日系アメリカ人リーダーシップ派遣事業開始
2001 年 9 月	同時多発テロ　アラブ系の集団拘束危機
	日系アメリカ人による抗議運動
2011 年 3 月	東日本大震災　トモダチ作戦と日系米人政治家

［文　献］

竹沢泰子，1994，『日系アメリカ人のエスニシティ――強制収容と補償運動による変遷』東京大学出版会.
Inouye, Daniels K. and Lawrence Elliot, 1967, Journey to Washington, Englewood Cliffs: Prentice-Hall.

パネルディスカッション

「震災後の復興について」

パネリスト：浜口　伸明（神戸大学経済経営研究所教授）
芹澤　成弘（大阪大学社会経済研究所教授）
矢野　　誠（京都大学経済研究所教授）
コーディネーター：三野　和雄（京都大学経済研究所教授）

京都大学 附置研究所・センターシンポジウム

「京都からの提言－21世紀の日本を考える」

第１回　平成18年３月16日（木）　10：00～17：30
東京・品川インターシティホール
サブテーマ：「危機をいかに乗り切るか？東アジアといかに向き合うか？」

第２回　平成19年３月17日（土）　10：00～17：00
大阪・エルおおさか（大阪府立労働センター）エル・シアター
サブテーマ：ノーベル物理学賞受賞者「湯川・朝永両博士が拓いた世界」
～湯川・朝永両博士　生誕百年に因んで～

第３回　平成20年３月８日（土）　10：00～17：15
横浜・新都市ホール
サブテーマ：「人間と自然：新たな脅威と命を守るしくみ」

第４回　平成21年３月14日（土）　10：00～17：25
名古屋・名鉄ホール
サブテーマ：「学問のつながりのユニークさ：それがつくる明るい未来」

第５回　平成22年３月13日（土）　10：00～17：15
福岡・アクロス福岡
サブテーマ：「グローバル社会に生きる―未来を見据える目」

第６回　平成23年７月３日（日）　10：00～18：00
京都・京都大学時計台百周年記念ホール
サブテーマ：「混沌の時代に光を探る」

京都大学　附置研究所・センターシンポジウム
京都からの提言
21世紀の日本を考える（第７回）
「明るい社会の未来像」
― 報 告 書 ―

発　行　日　　2013年２月26日発行
編集・発行　　京都大学経済研究所総務掛
　　京都大学「京都からの提言」事務局
住　　所　　〒606-8501　京都市左京区吉田本町
Ｔ　Ｅ　Ｌ　　075-753-7102
印　刷　所　　㈱双林印刷社